

【目的】

膵胆道がん術後の輸入脚症候群および膵液瘻に対する、挙上空腸盲端部を介した経皮的ドレナージ術を検討する。

【対象と方法】

対象は、当院にて2005年3月から2013年6月に、膵胆道がん術後の輸入脚症候群および膵液瘻に対して、挙上空腸盲端部を介した経皮的ドレナージ術を施行した8例で、男性7例/女性1例、平均年齢63歳(42-71歳)、輸入脚症候群6例/膵液瘻2例。再建方法は、膵癌ではmodified Child's法、胆道がんではRoux-en-Y法を用い、挙上空腸盲端部は外科的に腹壁固定されていた。輸入脚症候群の原因としては、腫瘍再発と術後合併症が見られた。

評価方法として、技術的成功率、臨床的成功率および合併症について後方視的に検討した。

【結果】

挙上空腸盲端部を介した経皮的ドレナージ術は全例で成功した。ドレナージカテーテルは5F-10Fを用い、輸入脚6例、膵管1例、膵管の瘻孔1例に留置した。悪性輸入脚症候群2例にドレナージ経路を用いて金属ステントを留置した。

臨床的成功率は87.5%(7/8例)で得られ、手技に関連した重篤な合併症は認めなかった。ドレナージカテーテルは4例で抜去可能で、平均カテーテル留置期間は143日(21-292日)であった。

【結語】

膵胆道がん術後の挙上空腸盲端部を介した経皮的ドレナージ術は、輸入脚症候群および膵液瘻に対して実行可能な手技である。

本研究によって、従来治療が困難であった膵胆道がん術後の合併症に対する新たな治療法の安全性と有用性が明らかとなった。

よって、学位を授与するに値するものと判断した。